

カラカス日本人学校から日本へ、カラカス日本人学校から世界へ、情報がどんどん発信されています！
カラカスの子どもたちの「可能性」が、また花開いた！ また種子が世界へ飛んでいった！



優秀賞

マンゴーが
どんどん落ちる
石みたい



海外子女教育振興財団が発行する月刊誌「海外子女教育」の11月号と12月号に、本校にとって嬉しい記事がそれぞれひとつずつ掲載されました。ひとつは、文芸作品コンクールの俳句の部で本校児童が入賞したこと、もうひとつは本校児童のオリンピックの作文が掲載されたことでした。

第37回海外子女文芸作品コンクール（海外子女教育振興財団主催）で、本校5年児童が、◆俳句の部◆で優秀賞に選ばれました。1月13日（金）の全校学活の時間に日本から届いた賞状と楯を授与しました。（写真：左から月刊誌「海外子女教育11月号」と12月号、授賞式の記念撮影、「俳句の部」優秀賞受賞作品）

月刊誌「海外子女教育12月号」に特集「リオ五輪を見た、世界各地の海外生」という記事が載りました。これは、リオ五輪開催の際のリオ・デ・ジャネイロ日本人学校の取り組みや世界の海外生が見た「リオ五輪」を児童生徒の作文を中心に振り返った記事です。その特集記事の最後に、「…リオ五輪には、シリアなどからの難民選手団も参加した。カラカス日本人学校（ベネズエラ）の小学部3年生児童は、広い視点から、日本にも滞在国にも直接関係のない難民選手のエピソードを交え、オリンピックで学んだことをつづった。その作文を最後に紹介しよう。」と書かれ、以下の作文が紹介されています。

4年に1度開かれるオリンピックが、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロでかいさいされました。わたしが心にのこったことは、二つあります。

一つ目は、開会式になんみんの選手のグループが行進していたことです。オリンピックのマーク、五輪の旗を持って行進していました。そのグループには、いろいろな国の選手がいました。たとえば、シリアのユスラ・マルディニさんは水泳選手で、女性です。18才のまだわかい選手です。マルディニさんは、約1年前にシリアから姉のサラさんといっしょにひなんしました。レバノンとトルコを通して、ボートに乗ってひなんしましたが、途中でボートのエンジンが止まってしまう、マルディニ姉妹とほかの二人が海にとびこみ、ボートをひっぱって約4時間泳いで、ギリシアのレスボス島に着きました。そして、1600キロの旅をして、ドイツに着いたそうです。わたしはこのことを知って、水泳選手だったら泳いで一人だけ助かることもできたのに、ほかの人も助けたことがすごいなあと思いました。また、自信を持ってこわがらないで海にとびこんで、ボートをひっぱったのは、すごいなあと思いました。そして、その後も努力して、このリオまで来たのですから、本当にすごい人です。感動しました。



二つ目は、女子バドミントンダブルスで、高橋選手と松友選手がペアを組んで、決勝でデンマーク選手と戦って、ゆうしょうしたということです。今まであまり強くなかった日本のバドミントンががんばって、オリンピックでゆうしょうしたのは、びっくりしました。考えてみると、ゆうしょうできたのは、二人の心が一つになってがんばったからだと思います。

わたしは、このオリンピックを見て、みんながいっしょけんめいにがんばっていることがわかりました。だから、わたしもマルディニさんのように人を助けたり、やさしくしたりしたいです。また、女子バドミントン選手のように、あきらめずにさいごまでやりぬく強い気持ちを持ちたいです。

（写真：オリンピック史上初の難民選手団の入場行進）